

社会問題本と人権

外 池 力

《論文要旨》

1890年代頃から1930年代まで社会問題本が多数刊行され続けられてきたにもかかわらず、それがあまり意識されていないのは、時代により社会問題という概念が、社会主義やマルクス主義、さらには社会政策などによって覆われてしまっているからである。現在、そのままの構図で済ましておくと、社会主義やマルクス主義の衰退とともに、明治期からの膨大な社会主義本だけでなく、社会問題本についても、その営為が軽視され、忘却の彼方に追いやられかねない。なぜ戦争と人権抑圧を防げなかったのかという問題に挑み、現在の社会問題に対処するための一助とするためにも、社会問題本をそれ自体として位置づける必要がある。現在では、社会問題の多くが、人権問題として総括されて、これらの時代の営為も人権の歴史としてまとめられてしまうことが多いが、当時は、社会問題は人権問題としては捉えられていない。本稿では、社会問題の内容の変遷と社会問題への対処、特に社会主義との関わりについて、社会問題本を題材として論じる。また戦前の「社会」の氾濫がどのような意味を持っていて、それが人権の概念にどう関係するのかについても考察する。

キーワード：社会問題本，社会主義本，日本の社会問題，人権，日本の出版史，日本の社会科学

戦前は、社会問題本の宝庫である。それは1890年代頃からはじまり1930年代まで続く。このような社会問題本の豊富で多岐にわたる内容があまり意識されていないのは、時代により社会問題という概念が、社会主義やマルクス主義、さらには社会政策などによって覆われてしまっているからである。社会主義やマルクス主義に覆われた歴史について、社会主義やマルクス主義

が、当時の社会問題の解決に果敢に挑戦した大きな流れであることを確認し、その時代における正当性を強調しておくことは必要である。しかし現在、そのままの構図で済ましておくと、社会主義やマルクス主義の衰退とともに、明治期からの膨大な社会主義本だけでなく、社会問題本についても、その営為が軽視され、忘却の彼方に追いやられかねない。この時代の真摯な態度と知恵を学び直すことにより、なぜこれだけの社会問題本が出版され、力強い問題意識が明確に存在していたのにもかわらず、戦争と人権抑圧を防げなかったのかという問題に挑み、また現在の社会問題に対処するためにも、社会問題本をそれ自体として位置づける必要がある。

現在では、社会問題の多くが、人権問題として総括されて、これらの時代の営為も人権の歴史としてまとめられてしまうことが多い^①。しかし、天賦人権の主張から自由民権運動を経て強まっていった社会問題への自覚と対応にもかかわらず、当時は、社会問題は人権問題としては捉えられていない。もちろん、その主な理由は、日本に限らず、人権が現在ほど包括的で普遍的な概念となっていなかったこともあるが、社会問題の解決が社会主義やマルクス主義などに委ねられ、人権概念の役割が小さかったことにある。労働問題などの社会問題の解決には、生存権、労働権、全労働収益権などの権利概念は使われたが、人権概念はほとんど使われない。戦前に「人権蹂躪問題」というと、拷問など警察の取り調べなどでの「行き過ぎ」の問題となり、それも、共産党に関係したとされた人々などは、いわゆる「国体否定者」の「テロリスト」として、その扱いは「人権外」とされ、「人権蹂躪問題」でさえも扱われなかった。このような事実を踏まえると、当時の社会問題を人権問題として総括してしまうのには一定の留保を必要とする。

以下、本稿では、社会問題の内容の変遷と社会問題への対処、特に社会主義とのかかわりについて、社会問題本を題材として論じる。また戦前の「社会」の氾濫がどのような意味を持っていて、それが人権の概念にどう関係す

るのかについても考察する。

1 社会問題本の変遷

まず、今回作成した社会問題本の年表について説明する⁽²⁾。

この年表は、明治期から終戦までの社会問題に関連した書籍と、社会問題に関するルポルタージュやノンフィクション本を左の欄にまとめた。そのうち一般的に社会問題本の代表とされる松原岩五郎『最暗黒の東京』（1893（明治 26）年）、桜田文吾『貧天地饑寒窟探検記』（同年）、横山源之助『日本の下層社会』（1899（明治 32）年）、農商務省商工局編『職工事情』1903（明治 36）年、細井和喜蔵『女工哀史』（1925（大正 14）年）の5冊は太字下線で示した。

「社会主義やマルクス主義の理論書や紹介本」、そして「社会小説、社会主義小説、プロレタリア文学」はそれぞれ別の欄とした。というのも、従来の研究では、社会主義本やプロレタリア文学の歴史が主流とされ、社会問題本は中心に据えられておらず、社会主義やマルクス主義の関連本に溶け込むか、それらの「言い換え」とされるか、あるいは社会主義本やプロレタリア文学の前史として位置づけられてきたからである⁽³⁾。もちろん、ここでの社会問題本と社会主義本との境界や、ルポルタージュと文学の境界はそれほどはっきりしたものではない。この年表では、社会問題本を中心に年表を作成したが、社会主義本やプロレタリア文学については、最盛期での出版数が膨大な量にのぼることもあり、その代表的なもののごく一部しか掲載していない。

		社会問題本	社会主義本	社会小説, 社会文学, 社会主義文学・プロ レタリア文学	関連事項 * 団体は設立年, 雑誌は創刊年
1873	M 6	トクヴィル (小幡篤次郎訳) 『上木自由の論』小幡篤次郎			
1874	M 7				『明六雑誌』
1875	M 8	津田真道「死刑論」, 「廃娼論」 『明六雑誌』			
1878	M 11	ミル (深間内基訳) 『男女同 権論』山中市兵衛			
1879	M 12	(横山初訳) 『英国救貧論, 第 1』丸屋善七等			
1880	M 13	外山正一『民権弁惑』外山正 一			『六合雑誌』
1881	M 14	松村操『東京穴探』思誠堂, スペンサー (松島剛訳) 『社 会平権論』報国社, スペンサー (井上勤訳) 『女権真論』思誠 堂	小崎弘道「近世社会党の 原因を論ず」『六合雑誌』		
1882	M 15	スペンサー (乗竹孝太郎訳) 『社会学の原理』経済雑誌社, 加藤弘之『人権新説』谷山楼	久松定弘『理想境事情: 社会党沿革』進学舎, 原 田澄『財産平均論』春陽 堂, (西河通徹訳) 『露国 虚無党事情』競錦堂, ウー ルセイ (穴戸義知訳) 『古今社会党沿革説』弘 令社出版局		東洋社会党, 社会 党
1883	M 16	スペンサー (大石正己訳) 『社会学』是我書房, 植木枝 盛『天賦人權弁』栗田信太郎, 馬場辰猪『天賦人權論』馬場 辰猪	威曼 (エンマン) (栗原 亮一訳) 『革命新論』松 井忠兵衛		
1884	M 17	高橋義雄『日本人種改良論』 石川半次郎, 有賀長雄『社会 学』東洋館			
1885	M 18		宮崎夢柳編『虚無党実伝 記鬼歌歌』旭橋活版所		
1886	M 19	田口卯吉『日本の意匠及情交: 一名・社会改良論』経済雑誌 社, 「東京府下貧民の真況」 『朝野新聞』	外山正一『社会改良と耶 蘇教の關係』丸善書店		
1887	M 20	羽田高英『風俗人情現時社会 の実情』東洋館, 末兼八百吉 『日本情交の変遷』晚青堂, ホーセッ (大野直輔訳) 『貧困救済論』有隣堂, 辰巳 小二郎『西洋日本女権沿革史』 哲学書院, 横山雅男『婚姻論』 女学雑誌社出版			国家学会, 『国民 之友』

社会問題本と人権

1888	M 21	ワード（三宅雄二郎訳）『社会学』文海堂ほか、鈴木梅四郎「大阪名護町貧民窟視察記」『時事新報』、植木枝盛「売淫公許の事を論ず」『国民之友』、犬養毅「高島炭鉱の実況」『朝野新聞』	岩田徳義『社会改良論』江藤書店、和田垣謙三「講壇社会党」『国家学会雑誌』、岡田良平「社会主義の正否」『哲学会雑誌』		
1889	M 22	河田麟也『日本女子進化論』河田麟也、植木枝盛『東洋の婦女』佐々城豊寿、爱国余史『娼婦存娼大議論の結局』書籍行商社			
1890	M 23	民谷吉次郎『社会学』博文館、酒井雄三郎「社会問題」『国民之友』、サンガー（土屋柳平訳）『万国娼妓沿革』興論社、北公輔「足尾銅山抗夫の惨状」『読売新聞』	酒井雄三郎「社会党の運動」『国民之友』		職工義友会（アメリカ）、『娼婦』
1891	M 24	加藤政之助『欧米婦人の状態』加藤政之助	石谷斎蔵『社会党瑣聞』石谷斎蔵		
1892	M 25	ヘンリー・ジョージ（江口三省訳）『社会問題前編』自由社、「社会問題の新潮」『国民之友』	ドーソン（光吉元次郎訳）『国家社会制』哲学書院、斯波貞吉『国家的社会論』富山房		東洋自由党、社会問題研究会（佐藤勇作ら）、『万朝報』
1893	M 26	松原岩五郎『最暗黒の東京』民友社、桜田文吾『貧天地饑寒窟探検記』日本新聞社、下村房次郎『日本の社会軋轢並救済法』交通学館、ヘンリー・ジョージ（角田剛一郎訳）『土地問題』内田老鶴圃、マイエット（青山大太郎など訳）『日本農民の疲弊及其救済策』青山大太郎、ジェフオンス（吹田綱六訳）『労働問題』経済雑誌社	民友社編『現時の社会主義』民友社、薬師寺政次郎、望月彰『社会的経綸策』文海堂、酒井雄三郎「社会主義」と「近世文明」との関連に就きて」『国民之友』		
1894	M 27	金井延『社会問題』専修学校	グラハム（森山信規訳）『新旧社会主義』博文館、長沢別天「社会主義一斑」『日本人』		
1895	M 28	渡邊為蔵『婦人と職業』民友社出版、安部磯雄「社会問題と慈善事業」『六合雑誌』	北岡朔助『社会革命論』社会学会（高知県）	田岡嶺雲「下流の細民と文士」『青年文』	
1896	M 29	「東京の貧民」『時事新報』、高瀬真彌『東京感化院創業記』東京感化院院司	大西祝「社会主義の必要」『六合雑誌』	田岡嶺雲「ヒューマニティー」『青年文』、堺利彦「望郷台」『読売新聞』	社会学会、社会政策に関する研究会（M30に社会政策学会となる）、平等会

1897	M 30	松原岩五郎『社会百方面』民友社、ホブソン（遠藤十郎訳）『貧民問題』東光館、牛山才治郎『工場巡視記』『時事新報』、農商務省商工局編『工場及職工に関する通弊一斑』有隣堂、田島錦治『日本現時の社会問題』東華堂、片山潜『英国今日の社会』警醒社、川上清『労働保護論』東華堂、留岡幸助『感化事業之発達』警醒社、松村介石『社会改良家列伝』警醒社	本城正琢『日本社会の将来』公愛社、片山潜『労働者の良友喇徹の伝』きんぐすれい館	高山樗牛「所謂社会小説を論ず」『太陽』	労働組合期成会、職工義友会、鉄工組合、社会政策学会、社会問題研究会（中村太八郎ら）、『労働世界』、『社会雑誌』
1898	M 31	安達憲忠『乞児悪化の状況』安達憲忠、石井十次『岡山孤児院』岡山孤児院活版部、庭田源八『鉈毒地鳥獣虫魚被害実記』、佐藤松哉『上毛孤児院』警醒社、田岡嶺雲『社会問題』『文庫』	安部磯雄「虚無党無政府党及び社会党」『労働世界』	内田魯庵「くれの廿八日」『新著月刊』、尾崎紅葉『金色夜叉』春陽堂、徳富蘆花『不如帰』『国民新聞』、金子筑水「所謂社会小説」『早稻田文学』	社会主義研究会、社会学研究会、貧民研究会
1899	M 32	横山源之助『日本の下層社会』教文館、横山源之助『内地雜居後の日本』労働新聞社、平出鑑二郎『東京風俗史』富山房、『社会道德に関する統計表』大塚泉弥、窪田静太郎『貧民救济制度意見』窪田静太郎、ガルスト（単税太郎）『单税経済学』経済雑誌社、吳文聡「本邦貧民の状況」『社会』	福井準造『近世社会主義』有斐閣、村井知至『社会主義』労働新聞社、豊原又男『資本と労働の調和』魁真楼、桑田熊蔵『欧洲労働問題の大勢』有斐閣	田岡嶺雲『嶺雲揺曳』新声社	『大阪週報』、『社会』
1900	M 33	島田三郎、木下尚江『魔娼の急務』博文館、坂常三郎編『娼妓存廢の断案』社会研究会、和田鏡司『娼妓と人権』開拓社、スミス（吳文聡訳）『社会統計学』東京専門学校出版部、木下尚江『足尾鉈毒問題』毎日新聞社、島村満都夫『社会改良論』静修館、留岡幸助編『監獄改良：監獄日曜日の為に』警醒社	久松義典『近世社会主義評論』文学同志会	田岡嶺雲、宮崎来城『佚文章』大学館、幸徳秋水「自由党を祭る文」『万朝報』	社会主義協会、貧民研究会、協同親和会、二葉幼稚園
1901	M 34	安部磯雄『社会問題解釈法』東京専門学校出版部、片山潜、西川光二郎『日本の労働運動』労働新聞社、柳瀬勁介『社会外の社会穢多非人』大学館、松本隆海編『足尾鉈毒惨状画報』青年同志鉈毒調査会、正岡芸陽『嗚呼亮澤園』新声社、佐藤儀助編『弱者の声』新声社、久松義典『社会研究新論』文学同志会	幸徳秋水『二十世紀の怪物帝國主義』警醒社、島田三郎『世界の大問題』社会主義概評』警醒社、久松義典『最近国家社会主義』文学同志会、西川光二郎『社会党』内外出版協会、黒岩漢香『理想団主意書』朝報社	中江兆民『一年有半』博文館、久松義典『社会小説東洋社会党』文学同志会	社会民主党

社会問題本と人権

1902	M 35	<p>原田道寛(東風)『木賃宿』、『貧民窟』、『乞食』大学館、大原祥一『社会問題』秀英舎、江東隆士『嗟呼三十五萬の霊』戸田学諭館、松本英子『鉦毒地の惨状』教文館、『工場調査要領』第一版、農商務省商工局、佐藤儀助編『亡国の縮図』新声社、バレット(田中太郎訳)『開明諸国に於ける感化事業』警醒社、シェンベルヒ(依田昌言、草鹿丁卯次郎訳)『工業的労働者問題』経済雑誌社</p>	<p>矢野竜溪『新社会』大日本図書、煙山専太郎『近世無政府主義』東京専門学校出版部、西川光二郎『人道の戦士社会主義者カール・マルクス』中庸堂書店</p>	<p>幸徳秋水『兆民先生』博文館、幸徳秋水『長広舌』人文社、内田魯庵『社会百面相』博文館</p>	<p>社会問題講究会、『社会学』(『社会』改題)</p>
1903	M 36	<p>農商務省商工局編『職工事情』農商務省商工局、川上峨山『魔窟の東京』国民評論社、リギョール(前田長太訳)『社会問題』昌平館、香月散士『暗黒社会』博成書院、守屋源次郎『独逸社会史：附・社会改良の方策』実業の日本社、久松獨堂『社会学問答』文学同志会</p>	<p>幸徳秋水『社会主義神髓』朝報社、安部磯雄『社会主義論』片山潜、西川光二郎『富の圧制』平民社、山口孤剣『破帝国主義』鉄鞭社、片山潜『我社会主義』社会主義図書部、片山潜『都市社会主義』社会主義図書部、矢野竜溪『社会主義全集』現代社、内村鑑三『基督教と社会主義』聖書研究社、ゾンバルト(神戸正雄訳)『十九世紀に於ける社会主義及社会的運動』日本経済社</p>	<p>徳富蘆花『黒潮』黒潮社、児玉花外『社会主義詩集』社会主義図書部、金尾文淵堂、磯野徳三郎『文明の大破壊：社会主義新小説』博文館、ベラミー(平井広五郎訳)『百年後の新社会』警醒社、坂本健一編『社会文学辞典』宝文館ほか</p>	<p>平民社、週刊『平民新聞』、『社会主義』(『労働世界』改題)</p>
1904	M 37	<p>幸徳秋水『東京の木賃宿』、『週刊平民新聞』、『工場調査要領』第二版、農商務省商工局工務課、ゾラ(堺利彦訳)『労働問題』春陽堂、留岡幸助『戦時と下層社会』『警察協会雑誌』</p>	<p>平民社同人編『社会主義入門』平民社、西川光二郎『土地国有論』平民社、幸徳秋水『社会民主党建設者ラサール』平民社、田添鉄二『経済進化論』平民社、マルクス、エンゲルス(幸徳秋水、堺利彦訳)『共産党宣言』『平民新聞』</p>	<p>木下尚江『火の柱』平民社、木下尚江『良人の自白』平民社、福田英子『妾の半生涯』福田英子、小杉未醒『陣中詩稿』嵩山房、モリス(堺利彦訳)『理想郷』平民社</p>	<p>『直言』</p>
1905	M 38	<p>ベルゲマン(稲垣末松訳)『社会的教育綱要』大日本図書</p>	<p>山口孤剣『社会主義と婦人』平民社、平民社同人編『革命婦人』平民社</p>	<p>松岡荒村『荒村追稿』国光社、田間嶺雲『壺中鏡』嵩山房、福田英子『わらはの思い出』平民書房</p>	<p>国家社会党、『新紀元』、『光』、『火曜』</p>

1906	M 39	松崎朴骨『土方稼穡』精美館、 柳文舎編輯所編『社会新辞典』 柳文舎	河上肇『社会主義評論』 読売新聞社、北一輝『国 体論及び純正社会主義』 北一輝、山路愛山『社会 主義管見』金尾文淵堂、 久津見蔵村『無政府主義』 平民書房、宮崎民蔵『土 地均享人類の大権』新進 書局、豊崎善之介『社会 主義批評』警醒社	島崎藤村『破戒』上 田屋、中島孤島『新 氣運』平民書房	日本社会党、『社 会主義研究』
1907	M 40	荒畑寒村『谷中村滅亡史』平 民書房、森近運平『大阪巡航 会社の亡状』大阪平民新聞、 金子喜一『海外より見たる社 会問題』平民書房、原子基 『北海道移民の悲惨』『平民新 聞』	堺利彦、森近運平『社会 主義綱要』鶴声社、福田 徳三『経済学研究』同文 館	幸徳秋水『平民主義』 隆文館、ドイツ (幸徳秋水訳)『神愁 鬼哭：革命奇談』隆 文館、白柳秀湖『駅 夫日記』『新小説』、 荒畑寒村『舞ひ姫』 『平民新聞』、山口孤 剣『父母を蹴れ』 『平民新聞』	『社会新聞』、『世 界婦人』、『平民新 聞』(日刊)
1908	M 41	『泰西に於ける救貧と防貧の 事業』内務省地方局	田添鉄二『近世社会主義 史』相愛社、木山熊次郎 『社会主義運動史』忠文 舎、山路愛山『現時の社 会問題及び社会主義者』 『独立評論』	白柳秀湖『鉄火石火』 隆文館、木下尚江 『乞食』昭文堂、上 司小剣『灰燼』春陽 堂	中央慈善協会、 『社会政策学会論 叢』
1909	M 42	井上友一『救済制度要義』博 文館、小山東助『社会進化論』 博文館	クロボトキン(平民社訳) 『麵包の略取』平民社、 フェリー(樋口秀雄訳) 『社会政策と近世科学』 金港堂	白柳秀湖『黄昏』如 山堂、徳富蘆花『寄 生木』警醒社、石川 啄木『食うべき詩』 『東京毎日新聞』	『自由思想』
1910	M 43	『工場衛生調査資料』農商務 省工務局、留岡幸助『社会と 人道』警醒社、河田嗣郎『婦 人問題』隆文館、鈴木文治 『東京浮浪人生活』『東京朝日 新聞』(～1911)	河田嗣郎『社会主義論』 宝文館、赤羽一(巖穴) 『農民の福音』自由活版 所	木下尚江『火宅』弘 学館書店、石川啄木 『一握の砂』東雲堂 書店、田岡嶺雲『病 中放浪』玄黄社、リ ヒテル(勝屋錦村訳) 『社会主義が実行さ れたら』天書閣	
1911	M 44	田中太郎『泰西社会事業視察 記』田中太郎、安藤陽洲『青 年必読公娼退治』積玉堂	戸田海市『社会主義と日 本国民』博文館、レゼー (教学研究和仏協会訳) 『社会主義と自由思想』 教学研究和仏協会	秋田雨雀『幻影と夜 曲』新陽堂、幸徳秋 水『基督抹殺論』丙 午出版社、木下尚江 『法然と親鸞』金尾 文淵堂、平塚雷鳥 『元始女性は太陽で あった』『青鞥』	社会党、浮浪人研 究会、『青鞥』

社会問題本と人権

1912	M 45 T 1	村上助三郎『東京闇黒記』京北社, 続編, 興文館, 内務省社会局『細民調査統計表』内務省社会局, 知久泰盛『人生探訪変装記』崇文館, 小河滋次郎『社会問題救世十訓』北文館, 永井柳太郎『社会問題と植民問題』新興社	ベートリ (友岡久雄訳)『マルクス価値論の社会的研究』弘文堂書房	堺利彦『売文集』丙午出版社, 石川啄木『悲しき玩具』東雲堂書店, 田岡嶺雲『数奇伝』玄黄社, 大杉栄『本能と創造』『近代思想』, 荒畑寒村『鑑底』『近代思想』, 平出修『畜生道』『スバル』	友愛会, 婦一協会,『近代思想』
1913	T 2	飯島幡司『社会問題の根本概念』宝文館, 石原修『衛生学上より見たる女工の現況』国家医学会, 和田芳子『遊女物語』文明堂, 遠藤隆吉『自殺論』集園学舎出版部, 山本美越乃『労働問題』巖松堂書店	カウツキー (堺利彦訳)『社会主義倫理学』丙午出版社	秋田雨雀『埋れた春』春陽堂, 平出修『逆徒』『太陽』, 石川啄木『啄木歌集』東雲堂書店, 大杉栄『野獸』『近代思想』	日本社会学院,『日本社会学年報』,『新真婦人』
1914	T 3	鈴木千代吉『社会問題煙害論』肥料研究会, 知久政太郎『変装探訪世態の様々』一誠堂書店, 山室軍平『社会廓清論』警醒社, 氏原佐蔵『結核と社会問題』医海時報社, 松野恵蔵『国家社会と酒害の關係』銀座会館, ヘンデルソン (栗原基訳)『社会政策概論』大日本図書	佐藤正編『マルクスとエンゲルス』赤城正蔵, 佐藤正『近世社会運動』赤城正蔵, アダムス等 (安部磯雄訳)『労働問題及サンディカリズム』大日本文明協会	小川未明『底の社会へ』岡村書店, 有島武郎『お末の死』『白樺』, 荒川義英『廃兵救済会』『近代思想』, 中村吉蔵『剃刀』『中央公論』	
1915	T 4	松崎天民『ベン尖と足跡』泰文社, 賀川豊彦『貧民心理の研究』警醒社, 安部磯雄『最近の社会問題』日社, カアベンター (堺利彦訳)『自由社会の男女関係』東雲堂書店, 宮嶋資夫『職業病』『近代思想』, 宮嶋資夫『労働者の障害』『近代思想』	神戸正雄『社会主義及社会的運動』広文堂書店, 土屋興『英国労働不安』慶応義塾出版局	徳永保之助『新戦場』『新評論』, 秋田雨雀『緑の野』『中央公論』	
1916	T 5	河津通編『最近社会政策:金井教授在職二十五年記念』有斐閣, フォード (藤森達三訳)『フォードの社会学』巖松堂書店, キング (田制佐重訳)『教育と社会』大日本文明協会	大杉栄『労働運動の哲学』東雲堂書店	宮嶋資夫『坑夫』近代思想社, 荒畑寒村『逃避者』東雲堂書店, 江馬修『受難者』新潮社, 平沢計七『工場法』『労働及産業』, 大庭片々子『吾輩の初旅』山口屋書店	労働者問題研究会

1917	T 6	河上肇『貧乏物語』弘文堂書房、河田嗣郎『社会問題及社会運動』附録(ゾムバルト「無産階級論、何故重米利加に社会主義なき乎」)岩波書店、エルウッド(婦一協会訳編)『社会問題の建設的解釋』博文館、桑田熊蔵『欧洲最近の社会問題』有斐閣、伊丹万里『蠶婦労働問題の研究』巖松堂書店	安部磯雄『欧州社会党の現状』泰山房書店、クロボトキン(大杉栄訳)『相互扶助論』春陽堂	宮本百合子『貧しき人々の群』玄文社、有島武郎『カインの末裔』『新小説』、小川未明『密告漢』『文章世界』	
1918	T 7	河上肇『社会問題管見』弘文堂書房、社会政策学会『婦人労働問題』同文館、上村行彰『売られゆく女：公娼研究』大鐘閣、村島婦之『ドン底生活』文雅堂、堀江婦一『労働問題十論』東京宝文館、婦一協会編『社会問題と教育問題』博文館、鈴木梅四郎『皇室社会新政』実生活社出版部	布施勝治『露国革命記』文雅堂、クロボトキン(三浦閑造訳)『革命の巷より』文昭堂	秋田雨省『三つの魂』文昭堂、小川未明『小作人の死』春陽堂、伊藤野枝『転機』『文明批評』、平沢計七『赤毛の子』『社会改良』	
1919	T 8	生田長江、本間久雄『最新社会問題十二講』新潮社、『社会問題叢書』(全8巻)福永書店、タウン(堀江朝訳)『社会問題』大日本文明協会、姉崎正治『宗教生活と社会問題』通俗大学会、深海豊二『無産階級の生活百題』製英舎出版部、小川二郎『どん底社会』啓正社、平沼淑郎『社会及社会問題研究』東盛堂書店、賀川豊彦『精神運動と社会運動』警醒社	山川均『社会主義者の社会観』叢文閣、マルクス(生田長江訳)『資本論』緑葉社、宇野宙人『社会主義とデモクラシー』船坂米太郎、高畠素之『社会主義と進化論』売文社、高畠素之『マルクス学研究』公文書院、カウツキー(高畠素之訳)『マルクス資本論解説』三田書房	平沢計七『創作労働問題』海外植民学校出版部、江口換『労働者誘拐』東京刊行社、沖野岩三郎『宿命』福永書店、大杉栄『獄中記』春陽堂、宮地嘉六『煤煙の臭ひ』天佑社	大原社会問題研究所、啓明会、協調会、大日本労働総同盟友愛会、新婦人協会、『社会問題研究』、『社会主義研究』、『国家社会主義』、『解放』
1920	T 9	『現代社会問題研究』(全25巻)冬夏社、同文館、高畠素之『社会問題総覧』公文書院、小泉信三『社会問題研究』岩波書店、三浦周行『国史上の社会問題』大鐘閣、天野藤男『地主と小作人：農村社会問題』二松堂、小川郷太郎『社会問題と財政』帝国地方行政学会、エルウッド(婦一協会訳)『社会問題の改進黨的解釋』博文館、窪田文三『現代日本と社会問題』同文館、神戸正雄『社会問題』日本図書出版、ヘッカア(波多野鼎訳)『ロシア社会学』聚英閣	堺利彦、山川均『マルクス伝』大鐘閣、ベラミー(堺利彦訳)『社会主義の世になったら』文化学会出版部、スバルゴー(浅野護訳)『過激主義の心理』日本評論社	秋田雨雀『仏陀と幼児の死』叢文閣、賀川豊彦『死線を越えて』改造社、宮地嘉六『或る職工の手記』聚英閣、宮地嘉六『放浪者富蔵』新潮社	新婦人協会、日本社会主義同盟、婦人社会問題研究会、『日本労働年鑑』、『日本社会衛生年鑑』

社会問題本と人権

1921	T 10	米田庄太郎『現代社会問題の社会学的考察』弘文堂書房、安部磯雄『社会問題概説』早稻田大学出版部、吉田只次『貧乏人根絶論』社会主義発行所	山川均『レーニンとトロツキー』改造社、メンガー(森戸辰男訳)『近世社会主義思想史』我等社、河上肇『唯物史観研究』弘文堂、佐野学『社会制度の諸研究』同人社、エルツバツヘル(若山健二訳)『無政府主義論』聚英閣	大杉栄『正義を求める心』アルス、津田光造『大地の呻吟』大同館書店、白鳥省吾『雲雀の巢』精華書院	日本労働総同盟、『種時く人』
1922	T 11	水野和一『社会問題概説』博愛社、佐野学『日本社会史序論』同人社書店、長谷川如是閑『現代社会批判』弘文堂書房、天川佐吉郎『小作人の生涯』『種時く人』	福田徳三『ボルシェヴィズム研究』改造社、宮島新三郎、相田隆太郎『改造思想十二講』新潮社、北沢新次郎『社会思想と其人々々』稲門堂書店、リードラ(堀利彦訳)『世界社会主義運動の現勢』アルス、有島武郎『宣言一つ』『改造』	中西伊之助『藩土に芽ぐむもの』改造社、前田河広一郎『三等船客』自然社、高倉輝『女人焚殺』アルス、宮嶋資夫『第四階級の文学』下出書店	全国水平社、日本共産党、日本農民組合、神奈川県県済会、横浜社会問題研究所、『社会思想』、『無産階級』、『前衛』
1923	T 12	『同人社社会問題叢書』(全4巻) 同人社書店、鈴木賀一郎『不良少年の研究』大鐘閣、葛岡敏『どん底より』白鷺社、東京市社会局編『東京市内の木賃宿に関する調査』東京市社会局、神代峻通『社会問題十五講』教育研究会、山田準次郎『社会問題の研究』法制時報社、本間久雄『婦人問題十講』東京堂書店	マルクス、エンゲルス(堀利彦訳)『共産党宣言』社会制度研究会、山川均『資本主義のからくり』僚友社、レーニン(茂森唯士訳)『レーニン論文集』日本評論社、山川菊栄『黎明期のロシア』総文館	金子洋文『地獄』自然社、前田河広一郎『赤い馬車』自然社、加藤一夫『虚無』春秋社、江口渙『恋と牢獄』新潮社、平林初乃輔『無産階級の文化』早稲田泰文社、大杉栄『自叙伝』改造社	『大原社会問題研究所雑誌』
1924	T 13	種時き社編『種時き雑誌：亀戸の殉難者を哀悼するために』種時き社、小河滋次郎『社会事業と方面委員制度』巖松堂書店、木村靖二『飢えたる農民』二松堂書店、生江孝之『社会事業綱要』巖松堂書店、河田嗣郎『家族制度と婦人問題』改造社、那須皓『農村問題と社会理想』岩波書店	山川均『無産階級の政治運動』更生閣、(郡山幸男訳)『社会主義が資本主義か 英国議会論討速記』東西社、白雲樓学人『怪傑レーニン』大日本雄弁会、マルクス(水谷長三郎訳)『ゴータ綱領批判』内外出版、西雅雄『英国労働党発達史』白揚社	金子洋文『鷗』金星堂、宮嶋資夫『黄金地獄』万有社、前田河広一郎『大暴風雨時代』新詩壇社、細田民樹『或兵卒の記録』改造社、麻生久『黎明』新光社	産業労働調査所、『社会学雑誌』、『文芸戦線』、『社会主義研究』、『マルクス主義』
1925	T 14	細井和喜蔵『女工哀史』改造社、『社会問題叢書』(全10巻) 文化学会出版部、河田嗣郎『社会問題体系』(全8巻) 有斐閣、長谷川良信編『社会政策大系』(全10巻) 大東出版社、『横手社会衛生叢書』(全21巻) 金原商会、椎名竜徳『生きる悲哀』鶴声社、高島素之『社会問題辞典』新潮社、テンニース(安倍浩訳)『欧州社会問題の発達』中外文化協会、山中篤太郎『日本労働組合法案研究』岩波書店、今和次郎ほか『本所深川貧民窟付近風俗採集』『婦人公論』	『大杉栄全集』(全9巻+別巻) 大杉栄全集刊行会、平野義太郎『法律における階級闘争』改造社、木村靖二『日本農民運動史』二松堂書店、青野季吉『無産政党と社会運動』白揚社、山川均『無産政党の研究』叢文閣、上村進『労働露国革命憲法論』三宝閣、ゾンバルト(林要訳)『社会主義と社会運動』同人社、トロツキー(勢田洋訳)『レーニン回想記』エルノス	萩原恭次郎『死刑宣告』長隆舎書店、秋田雨雀『骸骨の舞踏』叢文閣、中西伊之助『この罪を見よ』聚芳閣、新居格『労働ロシアの芸術論』日本フェビアン協会、トロツキー(茂森唯士訳)『文学と革命』改造社	農民労働党、『労働年鑑』、『大衆』、『社会学研究』

1926	T 15 S 1	大宅壮一編『社会問題講座』(全13巻)新潮社、森光子『光明に芽ぐむ日』文化生活研究会、藤森成吉『狼へ! (わが労働)』春秋社、林癸未夫『社会政策新原理』早稲田大学出版部、中央職業紹介事務局『芸妓妓婦紹介業に関する調査』中央職業紹介事務局、小島慈『文化の特質と社会問題』有斐閣	麻生久『無産政党とは何ぞ: 誕生せる労働農民党』思潮社、赤松克彦『転換期の日本社会運動』厚生閣書店、末川博『ソヴィエト・ロシアの民法と労働法』改造社、『レーニン著作集』(全10巻)レーニン著作集刊行会、カウツキー(柳田民哉、大内兵衛訳)『マルクス・エングルス評伝』我等社	葉山嘉樹『海に生くる人々』改造社、葉山嘉樹『淫売婦』春陽堂、細井和喜蔵『奴隷』改造社、藤森成吉『煤炭左衛門』新潮社、青野季吉『解放の芸術』解放社、ゴルキー(藤武緑郎訳)『夜の工場町』昭文堂	社会大衆党、日本労働党、労働農民党
1927	S 2	ウォード(小林徳次郎)『社会問題八講』警醒社、石角春之助『浅草裏譚』文芸市場社、佐倉啄三『製糸女工虐待史』解放社	北条一雄(福本和夫)『方向転換』白揚社、稲村隆一『農民運動の経済的並に政治的基礎』二松堂書店、佐野学『マルクス主義と無神論』叢文閣、ヤロスラウスキー(瓜生信夫訳)『レーニンの生涯と事業』希望閣	中西伊之助『武左衛門一揆』解放社、里村欣三『苦力頭の表情』春陽堂、黒島伝治『豚群』春陽堂、宮地嘉六『累』学芸社	全日本農民組合、日本農民組合総同盟、社会経済研究所、『インタナショナル』、『政治批判』、『農民運動』、『労働』
1928	S 3	田所輝明編『社会運動辞典』白陽社、草間八十雄『浮浪者と売笑婦の研究』文明協会、草間八十雄、道家斉一郎『売笑婦論考』史誌出版社、副見喬雄『帝都における売淫の研究』博文館、壺井繁治『十五円五十銭』『戦旗』、越中谷利一『戒厳令と兵卒』『戦旗』	産業労働調査所編『無産者政治必携』同人社書店、『マルクス・エングルス全集』(全27巻+別巻)改造社、『スターリン・ブハーリン著作集』(全16巻)白揚社、『クロボトキン全集』(全12巻)春陽堂	日本左翼文芸家総連合編『戦争に対する戦争: アンチ・ミリタリズム小説集』南宋書院、林房雄『鎮』春陽堂、黒島伝治『橋』改造社、山内謙吾『線路工夫』『文芸戦線』、小林多喜二『一九二八年三月十五日』『戦旗』	日本大衆党、ナッブ(全日本無産者芸術連盟)、日本労働組合全国評議会、内外社会問題研究所、『戦旗』
1929	S 4	『大思想エンサイクロペディア社会問題(1)(2)』第20、21巻 春秋社、林癸未夫『社会問題各論』日本評論社、石角春之助『乞食裏譚』文人社、今和次郎他編『新版東京案内』中央公論社、草間八十雄『水上労働者と寄りの生活』文明協会、立野信之『岐阜暴動と農民』『戦旗』、鹿地亘『木崎村の農民学校』『戦旗』	河上肇『マルクス主義のために』希望閣、レーニン(川内唯彦訳)『ロシアに於けるマルクス主義の建設』白揚社、デボーリン(河野重弘、永田広志訳)『哲学とマルクス主義』上野書店、山内封介『ロシア革命運動史』金星社	小林多喜二『蟹工船』戦旗社、徳永直『太陽のない街』戦旗社、田口運蔵『赤旗の靡くところ』文芸戦線社出版部、岩藤雪夫『賃銀奴隷宣言』南蛮書房	『プロレタリア』、『プロレタリア科学』、『マルクス主義の旗の下に』
1930	S 5	沖野岩三郎『娼妓解放哀話』中央公論社、草間八十雄『女給と売笑婦』凡人社、吉田英雄『日稼哀話』平凡社、戸田貞三『我国現時の社会問題としての人口問題』山口県、今和次郎『モデルノロヂオ: 考現学』春陽堂、ディール(山内正瞭ほか訳)『社会問題二十五講』改造社、赤神良徳『『金』の社会問題』章華社	渡辺政之輔『左翼労働組合の組織と政策』希望閣、田中惣五郎『東洋社会党考』一元社、スターリン(山口信次訳)『サヴェート農村の社会主義的建設』希望閣、バシュカーニス(佐藤栄訳)『マルクス主義と法理学』共生閣	窪川いね子『キャラメル工場』戦旗社、林房雄『都会双曲線』先進社、貴司山治『ゴー・ストップ』中央公論社、明石鉄也『失業者の歌』先進社、村山知義『暴力団記』日本評論社、今野賢三『女工戦』日本評論社、『社会文学集』(現代日本文学全集第39篇)(中江、酒井、矢野、安部、幸徳、堺、木下、大杉)改造社	『プロレタリア文学』

社会問題本と人権

1931	S 6	伊藤秀吉『紅灯下の彼女の生活』実業之日本社、伊藤秀吉『日本腐敗運動史』席清会、大槻正一『社会問題と道徳教育』日黒書店、オッペンハイマー（谷川弘実訳）『社会問題及社会主義』日本評論社、徳永直『大工場地帯を行く』『改造』、葉山嘉樹、里村欣三『東京暗黒街探訪記』『改造』、佐多稲子『女工さんと職場で語る』『文学新聞』	鍋山貞親『社会民主主義との闘争』希望閣、石浜知行『マルクス伝』改造社、モロトフ（高山洋吉訳）『社会主義は成功しつつある：モロトフ論集』白揚社、レーニン（山田喜作訳）『社会主義と帝国主義』希望閣	横光利一『機械』白水社、阪本勝『戯曲資本論』日本評論社、村山知義『東洋車輛工場』往来社、小林多喜二『オルグ』戦旗社、前田河広一郎『ソヴェートの連中と房吉』創建社、村山知義『勝利の記録』内外社、徳永直『何処へ行く？』改造社	『季刊社会学』、『ソヴェートの友』、『レーニン研究』、『無産者法律』
1932	S 7	鈴木栄太郎『農村社会調査法』郷土教育連盟、浅野研真『社会を診断する：性と犯罪と社会福利』日東書院、中野鈴子『農民の飢餓』『働く婦人』、大宅壮一『飢餓地を駆けめぐり同盟員と語る』『文学新聞』	『日本資本主義発達史講座』（全7巻）岩波書店、マルクス、エンゲルス（大田黒研究所訳編）『共産党宣言』河西書店、向坂逸郎『レーニン伝』改造社、ティーマン（橋本弘毅訳）『社会主義と資本主義』白揚社、ゾムバルト（田辺忠男訳）『プロレタリアの社会主義』日本評論社	堀田昇一『奴隸市場』中外書房、横村浩『間島バルチザンの歌』『プロレタリア文学』、林房雄『青年』『中央公論』、藤森成吉『亀のチャーリー』『改造』	社会大衆党、日本国家社会党、『唯物論研究』
1933	S 8	島中雄三編『社会問題辞典』平凡社、工藤英一『浮浪者を語る』大同館書店、戸田貞三『社会調査法』時潮社、永井亨『社会問題文典』上下、春秋社、安井誠一郎『社会問題と社会事業』三省堂	レーニン（伊藤弘訳）『カール・マルクス』岩波文庫、浅野研真『マルクス主義物語』大雄閣、小泉信三『マルクス死後五十年』改造社、ゴスプラン編（ロシア問題研究所訳）『ソヴェト五ヶ年計画総結果』ナウカ社	小林多喜二『転形期の人々』国際書院、藤森成吉『争ふ二つのもの』日本プロレタリア作家同盟出版部、大沢幹夫『機関庫』日本プロレタリア演劇同盟出版部	『年報社会学』
1934	S 9	猪俣津南雄『踏査報告窮乏の農村』改造社、高木武三郎『飢餓線上を行く一浮浪者の種々相』新興出版社、東京府学務部社会課『東京府不良住宅地区改良事業方報告書』東京府、加田哲二『維新以後の社会経済思想概論』日本評論社	アドラツキー、モロトフ編（広島定吉、直井武夫訳）『レーニン哲学ノート』白揚社、高田保馬『マルクス経済学論評』改造社、高橋利雄『実地踏査蘇連邦を語る』改造社	武田麟太郎『釜ヶ崎』文座書林、三好十郎『斬られの仙太』ナウカ社、江口渕『火山の下に』文化集団社、島木健作『獄』ナウカ社、平田小六『囚われた大地』ナウカ社	
1935	S 10	綿田民蔵『社会問題』改造社、藤林敬三『経済心理学』東洋出版社、森耕二郎『社会政策要論』弘文堂書房、長沼弘毅『労働銀行研究』自治刊行社	ロシア問題研究所『ソヴェト百科事典』ナウカ社、ミユアラレーニング（植村諦閑訳）『マルクス主義対社会主義』解放文化連盟出版部	中野重治『村の家』『経済往来』、貴司山治『石田三成』文学案内社、平林たい子『悲しき愛情』ナウカ社、橋本英吉『炭鉱』ナウカ社、小熊秀雄『小熊秀雄詩集』耕進社、太宰治『道化の華』『日本浪漫派』	

1936	S 11	大河内一男『独逸社会政策思想史』日本評論社、草間八十雄『どん底の人達』玄林社、草間八十雄『都市生活の裏面考察』財団法人中央教化団体連合会	『レーニン重要著作集』(全27巻)白揚社、マルクス・エンゲルス・レーニン研究所(広島定吉訳)『マルクス年譜』改造社、ゾンバルト(難波田春夫訳)『独逸社会主義』三省堂	立野信之『流れ』ナウカ社、武田麟太郎『下界の眺め』有光社、高見順『故旧忘れ得べき』人民社、伊藤永之介『鼻』『小説』	
1937	S 12	風早八十二『日本社会政策史』日本評論社、河田閏郎『日本社会政策』千倉書房、円谷弘『集团社会政策学』有斐閣、草間八十雄『灯の女関の女』玄林社、草間八十雄『闇の実話』玄林社、松田解子『一千の生霊を呑む死の硫化泥を行く』『婦人公論』	トロツキイ『裏切られた革命』中央公論社、ジイド(小松清訳)『ソヴェト旅行記』第一書房、フォイヒトワング(伊東鋭太郎訳)『モスコオ・一九三六年』春秋社	宮本百合子『乳房』竹村書房、島木健作『生活の探究』河出書房	
1938	S 13	河津通『社会問題と社会政策』有斐閣、江森盛弥『社会政策』三笠書房、山口正『日本社会事業の発展』甲文堂書店	上床国夫『科学者の親た』ソ連』日本評論社、直井武夫『ソヴェト計画経済』河出書房	間宮茂輔『あらがね』小山書店、徳永直『はたらく一家』三和書房、久保菜『火山灰地』新潮社	
1939	S 14	山田節男『貧苦の人々を護りて』日本評論社、草間八十雄編『市内浮浪者調査』東京市社会局、大原社会問題研究所編『独逸社会政策と労働戦線』栗田書店、協調会編『戦時社会政策』フランス編、ドイツ編、イギリス編、協調會、中川与之助『ナチス社会政策の研究』有斐閣、昭和研究会労働問題研究会『長期建設期に於ける我国労働政策』東洋経済新報社、永野順造『国民生活の分析』時潮社、ゾンバルト(戸田武雄訳)『社会政策の理想』有斐閣	山本勝市『計画経済の根本問題』理想社、布施勝治『ソ連報告』大阪毎日新聞社	金史良『光の中に』『文芸首都』	昭和研究会労働問題研究会
1940	S 15	大河内一男『戦時社会政策論』時潮社、大河内一男『社会政策の基本問題』日本評論社、我妻東策『明治社会政策史：土族授産の研究』三笠書房、平野婦美子『女教師の記録』西村書店	ヘルトレ(南秀三、松尾運平訳)『ニイチェと民族社会主義』青年書房、独逸文化研究所編『民族社会主義・ドイツの科学観』白水社	宮本百合子『広場』『文芸』	大政翼賛会、大日本産業報国会
1941	S 16	日本學術振興會議第四小委員会報告『時局と社会政策』日本評論社、尾高邦雄『職業社会学』岩波書店、シュルツ(東城忠男譯)『ナチスの社会政策』(ナチス叢書)アルス	伊部政一『計画経済の新課題：社会主義的計画経済の検討』理想社		

社会問題本と人権

1942	S 17	ゼルデ（雪山慶正訳）『ナチス独逸社会政策』実業之日本社	ゲッペルスほか（日独文化協会訳）『国民社会主義の基本問題』実業之日本社		
1943	S 18	笠山京『勤労者休養問題の研究』千倉書房、松本潤一郎『国家と社会理論』河出書房、ミュルダール（河野和彦訳）『人口問題と社会政策』協和書房	伊部政一『社会化計画経済論：ソ連計画経済の実証的批判』理想社		

社会問題とは、具体的に何を指したのだろうか。柳田泉は、次のように述べる。

その社会問題はどのようなものかといいますと、まづ万人平等，博愛慈善，男女関係，男性対女性の道德問題，恋愛観の変化，結婚，家族の倫理，人生教育，娼娼，禁酒，女性参政，孤児救済，平和，厭戦，富者対貧者，強者対弱者，国家乃至社会と個人，社会悪の観念，罪悪感の変化，社会改良，そういったものでありましょう。社会主義文学の先駆となる人道主義文学は，大抵一つ以上もったものでありますが，その間自ら軽重があり，文学という立場からは，貧者，弱者への同情，国家乃至社会と個人，社会悪の観念などを描いたものが中心となるように思われるのであります⁽⁴⁾。

これは，明治中期の社会文学のテーマについての記述であり，人道主義の立場による社会改良の観点で書かれているということを前提としてかなり広い範囲を含んでいる。

また嘉治隆一は『明治の社会問題』において次のように述べる。

大ざっぱに云って，それは産業革命以後の社会，云い換えるならば，資

本主義社会における階級関係に基づいて発生する色々の問題を意味すると見てよからう。(中略)一寸考えて見ても、工業労働者、農業労働者、商業使用人、俸給生活者、中産階級、婦人、水平社、貧民、奴隷、免囚、廃娼、悪疾治療、托児などに関する様々の問題を含んで居るのが偽らない現状である。(中略)それ故に、「明治の社会問題」は明治時代の社会史上に現われた重要な社会問題、並に、社会運動、社会思潮、政治思潮などの色々の要素の逐次的な研究といった観を呈するであろう⁽⁵⁾。

ここでの「資本主義社会における階級関係に基づいて発生する色々の問題」という定義については、時代の影響のもとイデオロギー色が強いとすることも可能であるが、一般的に労働問題や貧困問題をはじめとして多くの社会問題が、明治時代の資本主義の発展において表面化したり、深刻化したりしたさまざまな問題であることはいうまでもない。

また社会問題の解決を探るため、新たな思想や方法が求められ、社会運動や社会思想の紹介や論説についても、社会問題として扱われたために、社会問題は、社会思想や時事問題まであらゆるジャンルを含むことになる。たとえば、『月刊大原社会問題研究所雑誌』にある「社会問題関係主要雑誌記事目録」では、労働問題や婦人問題、そしてマルクス、エンゲルス、レーニン、ソヴェート、ファシズム関連はもちろんのこと、アメリカ産業復興法、ブロック経済、経済会議、軍縮問題や軍需工業などの関連記事も項目にあがっている⁽⁶⁾。

1930年代の社会問題辞典では、社会問題について、「直接に経済組織そのものの欠陥に由来せられたるか、もしくは間接に影響されたるかの差異により、広狭の二義に分類し得ることになる」として、「広義の場合には婦人の解放運動・普通選挙の要求の如きは元より、売淫婦の存在、暗殺の流行、乃至は家出事件・姦通沙汰の末に至る」とし、また狭義の場合には、「労働問

題と、その範囲を一にするものとして見做して差支えない」とされている⁽⁷⁾。

加田哲二は、『明治初期社会経済思想史』（1937（昭和12）年）において、最も初期の社会問題として、旧士族の授産の問題を挙げる。

かくてこの秩禄処分の結果として、（中略）大多数の士族は、農工商の何れに帰属するか、またはその一時的給付の貨幣を消費し尽して、自己の労働力を売るべき運命に陥るかであった。この士族授産の問題は、極めて複雑な問題を有しているが、これらの士族の大多数並にその子女が日本最初の工場労働者、即ち製糸女工の供給源泉であったことは、注意を要するところである。而して、士族授産の問題は、その階級の解消問題として、既に明治二十年前後には、大約解決の状態であったのであるが、明治維新の成功とともに士族は没落階級として社会問題を惹起した第一のものであった。第二の社会問題として、最も重要なものは、農民問題である⁽⁸⁾。

言うまでもなく、この時代の社会問題の中心は常に労働問題であったが、資本主義経済の発展により、女性の社会への進出が強いられることで、婦人問題が労働問題と結びつくことになる。

現在に於て主として経済上の事情に基く大問題が二つある。一は貧富の問題で、一は男女の問題である。言ふ迄もなく貧富の懸隔は古より存し、男女の区別も二十世紀になつて創めて出来た訳ではない。然るにも拘らず、是等の問題が今日の文明国に於て全く新なる問題なるが如く論議されつゝあるは、貧富の関係乃至男女の関係が、主として経済上の事情に基き、今や一大変動を生じつゝあるが為である⁽⁹⁾。

自足経済の崩壊の爲め、家庭の用事が著るしく減った事は、私の先に述べた所である。然るに自足経済の崩壊は即ち貨幣経済の普及を意味する。従って家庭に於ける仕事の減少は、同時に貨幣の重要な増加を来すこと、茲に述べ来たりしが如くである。而して既に是等の事情にして明らかならんか、家庭の雑務より解放されし女子が、進んで社会に出で、職を求め金を儲けんとするに至りし径路も亦、自ら明かである。(中略) 然るに一旦製糸会社や紡績会社に出ることになれば、これは自分の労力を他人に売って賃金を儲けるのである。女子が始めて自己独立の所得を有つに至るのである。其意味に於いて、それは全く新たなる現象であり、彼等は全く新たなる女である。——経済上より見て新たなる現象であり、新たなる女なるが故に、又精神上新たなる現象を惹起し、心理上新たなる女とも為る⁽¹⁰⁾。

労働問題を核とし派生した社会問題が社会主義やマルクス主義に覆われただけでなく、現実問題として、社会問題の解決が、社会主義やマルクス主義に求められ、それ以外の選択肢はありえないとされていく。また社会主義やマルクス主義への弾圧が強まると、社会問題を表向きの「看板」にして社会主義が論じられるようなこともなされた。このように、社会問題は何よりも社会主義との関係が重要となるので、次章ではこれについて考えてみる。

2 社会問題と社会主義

社会問題が論じられたピークの時期は、1920（大正9）年ごろとされることが多い。この時代の勢いある文章を紹介しよう。

現代社会問題の叫び声が、世の中の隅々にまで響き渡るようになったこ

とは、病人が自分の病気に気がついたと同様、先づ以て欣ぶべき事柄である。病気を気に病むは苦くないが、病気を覚めぬ病人には手の着けようがない。現代社会には、歴史の永き因縁因果の糾い纏われる貸借の決算として、骨がらみの社会病がある、此病を覚つたのが社会的煩悶である。此煩悶の呻きが即ち現代社会問題である。現代社会問題の研究は、此呻きを詩にうたう事ではなく、此病を療治する方案を打ち建つる努力である⁽¹¹⁾。

今や人類の生活は一大回転機にあり、世を挙げて改造の要求に熱中して居る。社会問題の攻究今日より盛なるは無く、社会運動の勃興今日より盛なるは無い。此の時に当り、その問題の真相とその運動の真精神とを了得し、よく挙措を誤まらざる可きは、苟くも文字を解するものゝ、急務で無ければならぬ⁽¹²⁾。

前者は、社会問題の解決としての社会主義には反対する立場からのものであるし、後者は、社会主義による解決を目指している立場からのものという違いはあるが、社会問題を解決していこうとする情熱は同じように激しいものがある。また、この時期に多数の社会問題本を世に出した安部磯雄は、次のように述べている。

我国に於て社会問題及び労働問題に関する研究の最も盛に行はれたのは明治31年の頃であった。而してこれ等の運動と共に社会主義の研究が或一部の人々によりて行はれる様になったことは自然の勢であると言はねばならぬ⁽¹³⁾。

このように1898（明治31）年前後も、社会問題本のピークの時期の一つ

とされる。この二つの時期の特徴を簡単にまとめると、最初の1898（明治31）年ごろのピークは、労働運動や社会主義運動が初めて組織化された時代である。つまり、1897（明治30）年には、初期の労働組合の原点である職工義友会や労働組合期成会が結成され、翌年には安部磯雄らによる社会主義研究会、1901（明治34）年には、一日で解散させられるが同じく安部らによる社会民主党の結成がある。

一方、1920年ごろは、マルクス主義紹介の最盛期であり、その1920（大正9）年には、日本最初のメーデーがあり、日本社会主義同盟が結成される。1921（大正10）年には、日本労働総同盟が設立され、1922（大正11）年には、日本共産党が非合法に結成される。前者のピークでは、1900（明治33）年に治安警察法、そして1910（明治43）年の大逆事件へといたり、後者のピークでは、1922（大正11）年に治安警察法の改正を経て、1923（大正12）年の関東大震災での社会主義者らへの虐殺、そして、1925（大正14）年の治安維持法公布となる。

これ以外にも、1930（昭和5）年前後は、当時画期的とされた円本の講座本である大宅壮一編集の『社会問題講座』を代表として、円本の社会問題講座ものが数多く出た時代であり、それも一つのピークといえる⁽¹⁴⁾。1929年の『社会問題辞典』を編纂した高畠素之は、その出版の動機と目的について、社会問題が「老幼男女を問わず」誰にとっても、「高等常識」の「温室」となることはもちろんのこととして、次のように述べている。

議員の立候補演説にも、今日ではもう昔ながらの、既成政党がどうしたの、挙国一致がどうしたのという事だけでは通用しない。一切の政治が社会化して来る如く、社会問題も政治の重要な部分を占めるようになるのである。そこで代議士の演説に於いても、旧来の形式的政論のみでなく、経済問題や、社会問題が可なりにより主要な範囲を占めて来なければな

らない。文芸家が評論を書き、宗教家が青年の間に伝道し、資本家が労働争議の対策する場合についても同様である⁽¹⁵⁾。

ここでいう「政治の社会化」とは、政争に明け暮れることなく、社会問題に正面から立ち向かうのが政治でなければならないということだけでなく、当時の社会主義の広がりや浸透が強く意識されている。加田哲二は「わが国の自由民権論における社会問題に対する態度の変遷」は、次のような段階を経過したとする。

(1)個人対個人の平等の主張。(2)政府に対する人民の価値または存在理由の主張。(3)特権政商の存在に対する活動的市民の立場からの自由主義的攻撃。(4)社会問題としての農民階級の窮乏の対策。(5)労働者状態の改善並に保護の必要の認識。(6)これらの社会問題対策としての土地共有論(地租単税論)。これが自由民権論及び運動における社会問題観の運動の発展の段階である。而して、第三の段階にいたるまでの間は、自由民権運動の本体たる自由党は、これを主張することが出来た。しかしながら、第四以下の段階にいたっては、自由党はその本来の組織構成上、ここまで進むことは不可能であった。故にこの段落において活動したものは、単に自由党左翼に過ぎなかったのである。而して彼等の中の進歩派は、遂に土地国有論にまで発達して行った。かくの如く見地から、社会主義に向うは実に一步にして足りる⁽¹⁶⁾。

労働問題が社会問題の中心である以上、社会問題が社会主義に覆われているのは当然であるが、社会主義とは一線を画する流れも初期のころから明確である。たとえば、パリのメーデーやブリュッセルでの第2インターナショナル大会に参加した日本人であり、その様子の報告を含めた初期の社会問題

本を記事にした酒井雄三郎については、次のように論じられている。

酒井雄三郎は社会問題の研究に従事していたが、彼は社会主義者ではない。社会主義がヨーロッパにおいて、一つの現実運動たることを認めるのであるが、彼はこれに対して同意を与えるものではない⁽¹⁷⁾。

社会主義の立場をとるにせよ、とらないにせよ、いずれも社会の矛盾から目をそらさずに、真摯に対応すべきということで、改革へのスタンスの違いはありながら、両者渾然一体となって、社会問題への認識が強まっていく。

社会主義についての認識が深まるにつれ、またそれをもとにした社会運動が強まるにつれ、社会問題への対応として、社会主義が前面に出ることになる一方で、よく知れられるように、資本主義体制や私有財産制を否定する社会主義とは一線を画した社会改良主義的な対応としての社会政策が強調される。

身体の病を治療するに応急法と根治法との二つあるが如く社会の疾病を治療するにも二つの方法がある。第一の方法は現在の社会組織其儘に保存し、単に必要に応じて種々なる改善を加へんとするのである。(中略)然るに第二の方法は現在の社会組織が貧乏を来した所の大原因であると信ずるが故に、先づこれを根本的に破壊して、其代りに全然新しき組織を以てせんとするのである。(中略)前者は改良であつて後者は改造である。而して第一の方法を普通社会政策若くは社会改良主義と称し、第二を社会主義と称して居る⁽¹⁸⁾。

1918(大正7)年の河上肇の『社会問題管見』では、その内容は、既にマルクスの生涯や方法が中心になっており、社会主義に批判的な社会政策学派

を批判し、次のように述べる。

現時の我国に於ても、社会政策を口にする者は朝野に少からず。然れども余を以て見れば、多くの論者は皆ベントム、ミルの垂流に過ぎず。例へば彼等は如何に熱心に労働者の保護を主張しつつありとするも、而かも其動機が之に依りて一国の産業を盛ならしめんとするに在る限り、それは生産政策の一部としての労働保護策に止まり、本来社会政策を以て目すべきものに非ず。社会政策と謂ふ以上は、分配の爲め分配政策ならざる可らず。生産の爲めの分配政策ならば、名は何と謂ふとも、其實一個の生産政策に過ぎざるものである⁽¹⁹⁾。

社会問題に関する研究会を改称し発足した社会政策学会は、「資本主義制度を維持する見地から、国家の介入による社会問題の解決を望み、その方向を研究し」⁽²⁰⁾ていくが、対抗者としての社会主義を失うことで、戦争や労働力の動員などの国策に従うようになった社会政策による解決を目指すことになる。すなわち、社会政策が国家の安寧の擁護者であることを強調し社会主義を感情的に排斥することで、「富者」支配による「腐敗墮落」した社会の秩序を維持せんとする立場となり、治安対策的発想による「救済」に陥ることになったと批判される⁽²¹⁾。

戦後になると、社会主義やマルクス主義が再興し、アカデミズムや社会運動で大きな勢力になるにつれて、再び、社会主義による社会問題の解決を当然のものとし、それを前提とせずに社会問題を論じる立場は、「科学的」な社会主義の思想・運動に比べて未熟であるとか遅れているなどとして評価されるようになる。

社会問題をめぐる流れを整理すると、次のような図表になる。

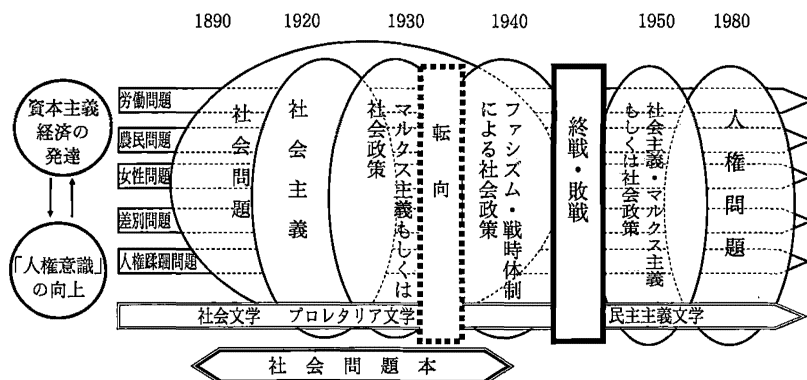


図1 社会問題の認識と社会問題本

表1 社会問題の動機、解決手段、理念

	動機(認識)→		←解決手段	理念(理論)	コメント
①	人道主義	社会問題	社会運動	×	理念の不在
②	人道主義	社会問題	社会運動	社会主義	理念の存在
③	社会主義	社会問題	社会運動	社会主義	理念の先行
④	×	社会問題	社会運動・社会政策	×	理念の欠落
⑤	×	社会問題	社会政策	×	理念と運動の欠落
⑥	人 権	社会問題	社会運動・社会政策	人 権	普遍的理念

まず①では、人道主義的な動機が、社会問題を認識させ、社会運動が起こる。しかし、社会主義はまだ、理念としてはあまり認識されていない。次に②では、理念として社会主義が定着し、運動を牽引する。さらに③では、社会主義が勢いづく、その理念に基づいて社会問題が認識されるようになる。しかし④では、社会主義が弾圧され、その代わりに社会政策が強調され、さらには⑤、社会運動自体も制限された上で、国の方針に従って社会政策が実行されるわけである。これは戦時中のさまざまな社会政策を示している。戦後にはいったん③の状態に戻ったが、社会主義の「崩壊」と運動への「幻

滅」の時代になると、社会問題と社会政策だけの「閉じされた」状態、すなわち理念や運動の不在により、新たな問題の認識や取り組みがなされにくい時代が続いてきた。ある意味では、それは⑤に近いものであったといえる。そして⑥では、ようやく人権が動機としても、理念としても定着することで、新たな問題の認識や取り組みがなされるだけでなく、その理念の普遍性により、国連などをはじめとする国際機関の勧告などを含め、世界的経験、すなわち他国での社会問題や社会政策の成功例や問題点を参考にして、自国の社会問題の状況の評価や批判をすることが容易となる。ただし、人権という理念は、個別性を出発点とする性格が強いために、社会主義に比べると、連帯を生み出しにくい面を持っているので、注意する必要がある⁽²²⁾。

3 「社会」の氾濫

明治期は、「昆虫社会」という本が発禁になったという「逸話」にみられるように、「社会」という言葉すら使いづらかったとも言われるが、しかし、特定の時代やケースを除き、全体としては明治中期から戦時中まで「社会」という言葉は氾濫していたと見てよいだろう。石田雄は、『日本の社会科学』の第二章「「社会」の意識化と社会政策学会」において、西欧における市民社会が「それ自身の秩序を持つ統一体（中略）とみなされるのに対して、日本の場合には、「社会」とは急速で跛行的な工業化の過程で、統一的な既存の秩序からはみ出し、おちこぼれた部分として意識された。すなわち、なお明治後期においては、一度出来上った市民社会の内部対立あるいは矛盾から「社会問題」が発生したというよりは、「社会」そのものが、元来「問題的」なものとして成立したとみるべきであろう」とした⁽²³⁾。そして、石田雄は、「国家」と「社会」の関連について、「日本では「社会」が未成熟で、ようやく「社会問題」が意識にのぼりはじめたこの明治後期において、早くも「国

家」が「社会」を吸収，包摂する傾向がみられる」とした⁽²⁴⁾。

確かに，「社会」の氾濫が，国家主義につながるのは，市民社会が未成熟であるという面もあるだろう。しかし，このように「市民社会」という媒介項を入れたうえで，国家と社会を対立させて考えるというよりもむしろ，「社会」そのものが，「デモクラシー」までも巻き込み，反個人主義を推し進め，自由や人権を抑圧する強権国家そのものと強く結合する側面があることを直視することが重要になる。まさに旧社会主義諸国の行く末もその形の一つだったといえる。

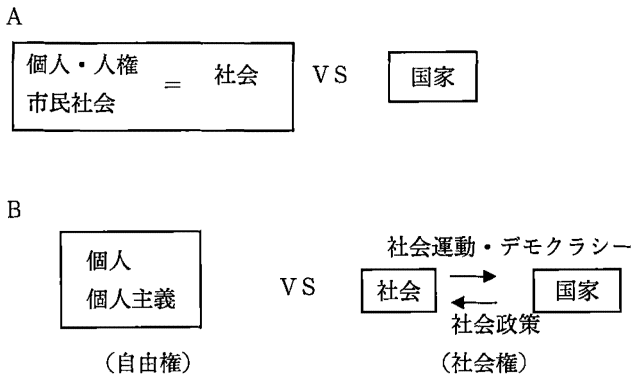


図2 国家と社会

Aのように，社会について市民社会を想定して，国家と対立させて考える場合，「社会」の氾濫は，国家への批判や対抗として，国家の暴走をチェックする力が働くように見える。しかし実際は，Bのように，社会運動やデモクラシーにより国家に対し社会政策が求められ，国家はその時々必要に応じて社会政策を遂行することで，その社会と国家の間での往復サイクルが完結してしまい，個人や個人主義は，国家どころか，社会からも排除される可能性がある。すなわち，国家が「反社会性」や「反社会的」という意味を一方的に固定し，異質にみえる個人の意見を抑圧することになる。現在の人権

社会問題本と人権

においても、社会政策により人権を擁護する社会権は、国家に依存しがちであり、それらが個人の自由権に優先したり、対立したりする危険性がある。

1930年ごろの円本時代の『社会問題辞典』には、人権の項目はなく、現在のそれにあたるものは、「個人主義」となる。「社会思想の根本原理」には「社会又は国家を本位とする主張と、人類の各個人を本位とする思想が、絶えず対立的に存在していたものである。前者を広義に於ける社会主義——もし社会主義なる名辞が経済学上の一学説と混同され易ければ団体主義——又は国家主義であり、後者が即ち個人主義である」とされる。「政治的個人主義」においては、グロチウス、スピノザ、ボップス、ロックらは、「人間自然の権利なるものを認め、各人は皆その権利の上に立脚する故に、国家は個人のために存在するものだとの立論をなした⁽²⁵⁾。

そもそも、ファシズムや国家主義だけでなく、社会主義もその起源からして、反個人主義の側面は強いのであるが、さらに言えば、デモクラシーも簡単に反個人主義的となりうる。

社会と個人、全体と一人の有機的の關係に於てその個人が、その一人が、社会と全体との意志を表現するところに、デモクラシーの生活があるのである。故にデモクラシーは、個人主義ではない、個人を主とし個人の生活を本位とする主義ではない、団体を主とし、団体の生活を本位とする主義である。即ち団体主義である。団体の中の一員として、その団体の意志、即ち謂ふ所の総意を表現するのが、デモクラシーの生活なのである。団体主義は。之が産業的経済的の方面に現はれた場合にはコレクティヴィズム即ち集産主義となる⁽²⁶⁾。

「社会」の氾濫のなかで、社会問題を解決しようとする力には、個人に反する契機があるということである。そもそも社会問題は、労働者、貧民、女

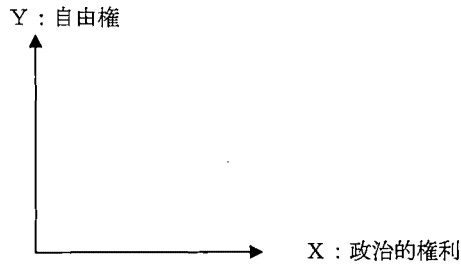
性などの対象について、それぞれ個人としての悲惨さに人道的に対応しようとしたことが出発点である。しかしそこから、貧困の原因については個人の問題よりも、社会の問題とされ、また貧困の対象も、個人というよりは社会階級、社会集団とされて、対策が図られる。そこまではよい。しかし、様々な自由が失われることで社会が閉じていき、そのなかで「改革」・「改造」が図られていくと、本来の目的である個人が軽視され、さらには社会からはじかれた個人を無視するような解決がまかりとおることになる。

民主化の理論の一般的な図式では、選挙を中心にした政治的権利と反対や批判の権利を中心にした自由という二つの要素により論じられることが多い⁽²⁷⁾。この二大要素は、たとえば、Freedom House の Freedom in the World における自由度の測定における PR (Political Rights) と CL (Civil Liberties) による分析などにもつながり⁽²⁸⁾、また「自由民権」運動において、自然権に基づいた自由を求める方向と、国会や選挙権の拡大をめざした民権を求める方向に分けられることにもみられるように、かなり普遍性のある分け方である。

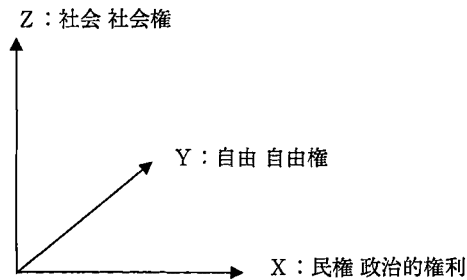
しかし、それに社会という要素を加えて、三次元にして考えると、自由が抑えられ、社会の方向へだけ改革の流れが傾く場合は、本来、政策の失敗をチェックし、批判するフィードバックが欠けた歪んだ政治体制となる。このプロセスは、「社会」の氾濫が、なぜ戦争や人権抑圧を防げなかったという問いに対する一つの答えとなる。また独裁体制や全体主義体制について、一枚岩的なもののように表面的にみなすのではなく、そこには多様な社会問題に対処するための活発な社会運動が存在しているというように動的にとらえる契機となる。また社会主義者や社会活動家たちが社会運動を続けながら、独裁体制や戦争に協力してしまうという転向のメカニズムを説明する一助ともなる⁽²⁹⁾。

社会問題本と人権

A 一般的な民主化の図（二次元）



B 民主化の図（三次元）



C 歪んだ民主化の図（社会（権）>自由（権））

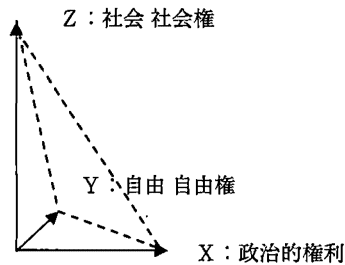


図3 民主化と社会

人権において、社会権と自由権が補完し合わなければならないにもかかわらず、それら二つの人権の補完性を根拠づけることが、それほど簡単ではないことについては論じることはしないが、ここでは、国家と社会の関係が閉じることなく、個人が排除されないようにするために自由権を前提とした政策のフィードバック、すなわち情報の公開と批判の自由が保証されるべきで

あるということだけを指摘しておく。また社会主義不在の時代においても、様々な社会問題の認識とそれらへの対処が、ばらばらに孤立することなく、多様な問題を関連づけて捉えるためにも、人権の普遍性の確認が重要であると考えられる。

《注》

- (1) たとえば、世界人権問題研究センター、上田正昭編『人権歴史年表』山川出版社、1999年を参照のこと。
- (2) この年表を作成するにあたっては、主として以下の文献及び国立国会図書館のOPAC、「デジタルコレクション」(<http://dl.ndl.go.jp>)、「CiNii: 大学図書館の本をさがす」(<http://ci.nii.ac.jp/books/>)、「日本の古本屋」検索サイト(https://www.kosho.or.jp/products/list.php?mode=from_header)などを参照した。

稲村徹元、森崎富貴子、山口美代子編「明治記録文学年表」(『明治記録文学集』明治文学全集、第96巻、筑摩書房、1967年所収)、浦西和彦『日本プロレタリア文学史年表事典』日外アソシエーツ、2016年、浦西和彦『日本プロレタリア文学書目』和泉書院、2009年、太田雅夫編『明治社会主義資料叢書』第4巻、平明文庫著作集、上巻、新泉社、1972年、大原社会問題研究所編『日本社会主義文庫：世界大戦（大正3年）に到る、第1輯』大原社会問題研究所、1929年、岡野他家夫『明治言論史』鳳出版、1974年、小田切進「明治社会主義文学年表」(小田切進編『明治社会主義文学集』(2)明治文学全集、第84巻、筑摩書房、1965年所収)、風早八十二『日本社会政策史』日本評論社、第二版、1947年(初版1937年)、籠山京編『女工と結核』生活古典叢書、第5巻、光生館、1970年、嘉治隆一編『明治文化資料叢書』第5巻、社会主義編、風間書房、1960年、嘉治隆一編『明治文化資料叢書』第6巻、社会問題編、風間書房、1961年、加田哲二『明治初期社会経済思想史』岩波書店、1937年、河村望「日本社会学史文献年表」(河村望『日本社会学史研究』上、下、人間の科学社、1973年、1975年所収)、紀田順一郎『東京の下層社会』筑摩書房(ちくま学芸文庫)、2000年、下出隼吉『明治社会思想研究』浅野書店、1932年、前掲『人権歴史年表』、立花雄一『明治下層記録文学』筑摩書房(ちくま学芸文庫)、2002年、槌田満文『東京記録文学事典』柏書房、1994年、西田長寿編解説『明治前期の都市下層社会』生活古典叢書、第2巻、光生館、

社会問題本と人権

- 1970 年，再版 1981 年，法政大学大原社会問題研究所編『社会・労働運動大年表』新版，労働旬報社，1995 年，細川嘉六監修，渡部義通，塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説』大月書店，1958 年，明治文化研究会編『明治文化全集』第 3 巻，政治篇，日本評論社，第 3 版，1969 年，明治文化研究会編『明治文化全集』第 6 巻，社会篇，日本評論社，第 3 版，1969 年〈特にその内，下出集吉「社会文献年表」〉，明治文化研究会編『明治文化全集』第 15 巻，社会篇（続），日本評論社，第 2 版，1969 年，明治文化研究会編『明治文化全集』第 16 巻，婦人問題篇，日本評論社，第 2 版，1969 年，山泉進『社会主義事始：「明治」における直訳と自生』思想の海へ〔解放と変革〕第 8 巻，社会評論社，1990 年，『近代社会主義文学集』日本近代文学大系，第 51 巻，角川書店，1971 年，『近代社会文学集』日本近代文学大系，第 50 巻，角川書店，1973 年，『社会主義文学集』日本現代文学全集，第 32 巻，講談社，1963 年，『社会文学集』現代日本文学全集第 39 篇，改造社，1930 年，『社会文学事典』刊行会編『社会文学事典』冬至書房，2007 年，『日本プロレタリア文学集，第 33 巻（ルポルタージュ集 1）』新日本出版社，1988 年，『日本プロレタリア文学集，第 34 巻（ルポルタージュ集 2）』新日本出版社，1988 年，『日本プロレタリア文学集，別巻（プロレタリア文学資料集・年表）』新日本出版社，1988 年。
- (3) 梅森直之は「初期社会主義の歴史的意義を，「現存した社会主義」を準備したという点ではなく，資本主義的な近代性そのものへの批判を構想したという点に求めるならば，そうした資本主義への抵抗者・批判者の系譜は，けっして社会主義者を自任した人々の集団へ限定されないことになる」（梅森直之『初期社会主義の地形学^{トポグラフィ} 大杉栄とその時代』有志舎，2016 年，4 ページ）としているが，本稿の社会問題本の位置づけは，「初期社会主義」をさらに相対化した形といえる。
- (4) 柳田泉「明治に於ける社会主義文学の勃興と展開」（『明治社会主義文学全集（1）第 83 巻，筑摩書房，1965 年所収）461 ページ。
- (5) 嘉治隆一『明治の社会問題』慶友社，1955 年，7-8 ページ。
- (6) 『月刊大原社会問題研究所雑誌』大原社会問題研究所，第 1 巻，第 1 号～第 6 号，1934 年 7～12 月。
- (7) 高畠素之編『社会問題辞典』新潮社，1925 年，615 ページ。なおこの項目は，神田豊徳編『社会辞典』龍文舎，1931 年，147 ページにそのまま採録されている。
- (8) 掲掲『明治初期社会経済思想史』656-657 ページ。
- (9) 河上肇『社会問題管見』弘文堂書房，1918 年，339-340 ページ。
- (10) 同上，386-391 ページ。

- (11) 建部遜吾「序論」(日本社会学院調査部編『現代社会文明』現代社会問題研究, 第1巻, 冬夏社, 1920年所収), 6ページ(龍溪書舎, 1993年, 復刻版)。
- (12) 生田長江, 本間久雄「自序」『最新社会問題十二講』新潮社, 1919年。
- (13) 安部磯雄『社会問題概論』早稲田大学出版部, 1921年, 1ページ。
- (14) 拙稿「円本と人権」『政経論叢』明治大学政治経済研究所, 第84巻, 第5・6号, 2016年3月, 77-79ページ。
- (15) 高島素之「序」, 前掲『社会問題辞典』序の2-3ページ。
- (16) 前掲『明治初期社会経済思想史』687ページ。
- (17) 同上, 678ページ。
- (18) 前掲『社会問題概論』15ページ。
- (19) 前掲『社会問題管見』298-299ページ。
- (20) 松永昌三「社会問題の発生」『岩波講座 日本歴史』第16巻, 近代3, 1976年, 256-257ページ。
- (21) 同上, 271ページ。
- (22) 拙稿「人権批判の構造」『政経論叢』明治大学政治経済研究所, 第80巻, 第5・6号, 2012年3月, 46-49ページ。
- (23) 石田雄『日本の社会科学』東京大学出版会, 1984年, 46-47ページ。
- (24) 同上, 58ページ。
- (25) 前掲『社会問題辞典』372-374ページ。
- (26) 前掲『最新社会問題十二講』212ページ。
- (27) ロバート・A. ダール『ポリアーキー』(高島通敏, 前田脩訳) 岩波書店(岩波文庫), 2014年, 14, 59ページの図, ギジェルモ・オドンネル, フィリップ・シュミッター(真柄秀子, 井戸正伸訳)『民主化の比較政治学: 権威主義支配以後の政治世界』未来社, 1986年, 51ページの図。
- (28) Freedom in the World (<https://freedomhouse.org/report-types/freedom-world>)
- (29) 拙稿「転向論」『政経論叢』明治大学政治経済研究所, 第82巻, 第5・6号, 2014年3月参照。